

# NEWS LETTER



2020年11月発行 一般社団法人 日本口腔衛生学会  
ニュースレター第3号

事務局 〒170-0003 東京都豊島区駒込 1-43-9 (一財) 口腔保健協会内  
TEL: 03-3947-8891 FAX: 03-3947-8341

E-mail: [gakkai37@kokuhoken.or.jp](mailto:gakkai37@kokuhoken.or.jp) HP: <http://www.kokuhoken.or.jp/jsdh/>

発行人 山下喜久 編集 広報委員会



## CONTENTS

- 日本口腔衛生学会・学術大会（第24回日本歯科医学会学術大会併催特別大会）の開催について
- 新型コロナウイルス感染症特集・その2
- 新任教授紹介
- 元気です！名誉会員
- 行歯会だより
- 大学／研究機関の教室紹介
- 本学会 HP リニューアルのご案内
- 各種お知らせ
- 広報委員会より（編集後記）

## 第24回 日本歯科医学会学術大会併催の 本学会特別学術大会開催のご案内

<https://site2.convention.co.jp/24jads/>

2021年9月23日(木・祝) 24日(金) 25日(土) **パシフィコ横浜** (神奈川県横浜市)

## 大会長挨拶

山下喜久 (九州大学大学院歯学研究院口腔保健推進学講座口腔予防医学分野 教授)



2021年日本口腔衛生学会特別学術大会を、パシフィコ横浜で来年9月23日から25日の3日間開催される第24回日本歯科医学会学術大会と併催の形で開催いたします。来年は定例の第70回日本口腔衛生学会総会の会長を岡山大学の森田 学教授が務められ、宜野湾市の沖縄コンベンションセンターで5月26日から28日に開催されるため、日本歯科医学会学術大会との併催大会をどのように扱うかについて理事会で議論となりました。

併催の学術大会を第71回日本口腔衛生学会総会とすると2022年に鹿児島大学の於保孝彦教授が会長を務められる総会が第72回総会となり、以降開催年と大会の回数にズレが生じるため、将来に混乱を招くことが危惧されます。また、日本歯科医学会においてもこのような各分科会の学術大会との併催は初めての試みであり、今後の継続性も先が読めません。と言うことで、今回は臨機応変にあくまでも特別学術大会として定例の総会とは切り

離して企画することとなり、日本歯科医学会に軒を借りて本学会の学術分野に特化した運営とし、現理事長である私、山下がお世話係となって開催することとなりました。

第24回日本歯科医学会学術大会では、本学会を含めた13の分科会ならびに1つの地区歯科医師会の学術大会が併催されることで、盛大に多数の企画が盛り込まれ、日本歯科医学会が音頭をとって纏められた「2040年問題に向けての歯科のイノベーションロードマップ」を社会に広めることを核としています。本学会も、「予測歯科の健康保険導入」や「プライマリヘルスケア口腔専門科の確立」などを含めた5つのイノベーションロードマップを掲げており、設立当初から日本歯科医学会を支えている専門分科会の一員として、これからの歯科保健医療に果たすべき本学会の使命を日本歯科医学会が示すイノベーションロードマップに沿って明示できればと思っています。

現在、本学会からは口頭発表のセッションに9つの企画案を日本歯科医学会に提案しており、その採択を待っているところです。また、ポスター発表セッションには50の演題数の割り振りを要望しておりますので、第70回日本口腔衛生学会総会で沖縄まで足を運ぶことに躊躇されている方はこの特別学術大会のポスター発表の場をご利用いただくこともご検討ください。詳細につきましては未定の部分が多く、十分な情報を提供できず申し訳ありませんが、大会参加費は今のところ無料を予定しておりますので、来年9月23日から25日のご予定を空けていただき、一人でも多くの会員の皆様にご参加いただければと思います。

以上誠に簡単で恐縮ですが、2021年日本口腔衛生学会特別学術大会のご案内を申し上げますとともに、同特別学術大会のお世話係として皆様のご来場を心よりお待ちしております。

お知らせ

## 第 24 回日本歯科医学会学術大会併催・ 特別学術大会のポスターセッション 演題募集

本特別学術大会のポスターセッションの演題募集が始まりました。本学会員の積極的な応募をお願い致します。

- 発表方法：学術大会 Web サイトでの公開（会期中の会場での発表はなし）
- 大会参加費：無料
- 募集期間：令和 2 年 11 月 2 日（月）～ 12 月 18 日（金）14：00
- 応募方法：日本口腔衛生学会 HP ポスター演題登録サイト (<https://pro.form-mailer.jp/fms/765b36ae210558>)

新型コロナウイルス感染特集・その 2

### 新型コロナウイルス感染症（COVID-19）関連情報アップデート

COVID-19 対策検討作業部会長 久保庭雅恵



先日、日本口腔衛生学会ニュースレター第 2 号で、「唾液を用いた COVID-19 検査法と新規迅速検査法の現状」についてご報告させていただきましたが、その後も COVID-19 対策検討作業部会ホームページ上 [ [http://www.kokuhoken.or.jp/jsdh/news\\_20200518.html](http://www.kokuhoken.or.jp/jsdh/news_20200518.html) ] に有益な情報が次々とアップされていますので、この場をお借りしてご紹介させていただきます。

まず、2020 年 7 月 27 日付で、「新型コロナウイルス時代の口腔健康管理：課題と対応」を掲載いたしました。この記事では、ウイズコロナ期において予防的歯科診療を実施する際の注意点について取り上げました。特に、緊急事態宣言時に受診を控えた慢性歯科疾患を有する患者に対して歯科診療を実施する場合に考慮すべき点を図示し、① COVID-19 の流行程度、②患者の年齢や全身状態による COVID-19 重症化リスク、③慢性歯科疾患の重症化リスク、④個人感染防護具・消毒用薬剤の充足状況や時間差診療等を考慮したアポイント可能な患者数、のバランスによって個々の患者の受診推奨レベルを勘案しつつ個別対応する、というコンセプトを提示しました。

次に、2020 年 7 月 29 日付で、「ウイズコロナでの歯科口腔保健 — 各国の対応と課題 —」を掲載いたしました。こちらの調査報告では、地理的バランスを考慮して選んだ 14 カ国を対象とし、2020 年 5 月末から 6 月にかけてウイズコロナでの歯科診療に関する指針の有無について簡易調査を実施した結果が示されました。米国はじめアジア諸国では概ね対応がなされていた一方、アフリカ、中東、南米などでは十分な対応がなされているとは言えず、国・地域によってばらつきがあることが浮き彫りになりました。

さらに、2020 年 8 月 17 日付で、「9 都道府県歯科医師会に対する新型コロナウイルス感染症に関するアンケート結果報告書」を掲載いたしました。この記事では、最初に緊急事態宣言が発出された 7 都府県に SARS-CoV-2 PCR 検査陽性者数が比較的多い北海道と愛知県を加えた 9 都道府県歯科医師会を対象としてアンケート調査を実施し、各歯科医師会会員数当たりの PCR 検査陽性者率と調査都道府県民の人口当たりの PCR 検査陽性者率を比較することで、歯科医師の感染リスクを推定した結果を掲載しています。結論として、アンケートを実施した時点の結果から、歯科医師の PCR 検査陽性率は一般都道府県民の平均的な PCR 検査陽性率と同程度であり、わが国における現状の歯科医療での SARS-CoV-2 感染リスクはとくに高いとは考えられないことが示されています。このプロダクトの内容は、2020 年 9 月 1 日付の日本歯科新聞一面に取り上げられ、大きな反響がありました。

COVID-19 対策検討作業部会が不要となり、解散する日が早晚やってくるのが望ましいのには間違いありませんが、まだ当分ウイズコロナ期が継続する雲行きですので、今後も少しでも皆様のお役に立つよう、活発な情報発信に努める所存です。11 月には、ライオン歯科材(株)が発行されている情報誌『LION Dent. File』に、当作業部会のインタビュー記事が掲載される予定ですので、是非ご一読ください。

最後に、この部会の発信力は、素晴らしいプロダクトをご提供いただいている作業部会メンバーの先生方のご尽力の賜物です。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

# 新任教授紹介

## 北海道医療大学歯学部口腔構造・機能発育学系保健衛生学分野

教授 三浦宏子



令和2年4月1日付で、北海道医療大学歯学部保健衛生分野の教授として着任いたしました。どうぞ宜しくお願いいたします。前職である国立保健医療科学院在職中は、地域歯科保健に関する厚生労働科学研究費での研究事業や国の検討会等で、日本口腔衛生学会の諸先生方には大変お世話になりました。この場をお借りして、併せて厚くお礼申し上げます。

私にとりましては、約20年ぶりの母校での勤務となりますが、新たな立場をいただき、身の引き締まる思いでございます。北海道医療大学は、「新医療人育成の北の拠点」として、地域保健・医療へ貢献する医療専門職の育成を図り、研究面でも地域に貢献することを社会的使命としています。今後は、これまでの経験を活かし、地域歯科保健学や社会歯科学領域での調査研究を推進し、歯科口腔保健施策にも寄与する学術知見を発信していきたいと考えております。日本口腔衛生学会の理念である「歯・口腔の健康を守る」を達成するために、微力ながら尽くして参ります。

## 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科健康推進歯学分野

東北大学大学院歯学研究科歯学イノベーションリエゾンセンター地域展開部門(クロスアポイントメント)教授 相田 潤



### Dental public health の普及を目指して

学生時代の予防歯科学の講義で「予防できるのであれば、予防をしたほうがいいのでは？」と素朴に思ったこと、口腔外科学の講義がきっかけで国際歯科保健で活動される方々のお話をうかがえたこと、保健医療科学院で公衆衛生学の研修を1年間受けられたことや興奮する論文や書籍に出会えたことなどが、疫学・公衆衛生学の道に私を進ませてくれました。口腔衛生学会の会員の皆様には、このころから今に至るまで、多くのことを教えていただいています。

2つの大学の教授に就任させていただいたこれからは、教わるだけでなく、若い人々を育てる責任を痛感しています。本来、疫学はすべての臨床医にとって、自身の患者さんたちの状態を判断し、エビデンスに基づいた診療を行うために必須の学問です。同様に公衆衛生学は、行政で働くために必要不可欠な学問です。しかしながら、口腔衛生学会の会員数の減少に見るように、必ずしも多くの方々に届いていないように思います。Dental public healthの普及を通し人々の健康をより一層増進させていくことを自身のミッションと考え、努力していきたいと考えています。皆様の引き続きのご指導をお願い申し上げます。

## 大手前短期大学歯科衛生学科

教授 関根伸一



2020年4月に開設した大手前短期大学歯科衛生学科に赴任致しました関根です。赴任と同時にコロナが猖獗を極め、本学でも入学式や対面での授業が行えない状態となりました。物理学者の寺田寅彦の随筆の中にも「正當にこだわる」と書かれていますし、新型コロナウイルスについても「正しく恐れよ」の精神は理解しているつもりでしたが、キャンパスに学生はおらずWeb授業ばかり、夙川のせせらぎだけを感じながら学生にはもう会えないでは…と不安な日々を過ごしておりました。

何とか再開できた講義最終日のテストでは『この時代を反映する問題でも！』と次の問題を入れました。「AさんはCOVID-19の感染が原因で強い炎症が起こった。この現象を〇〇症という。」というものです。テスト終了後に教室でパラパラと回答を確認すると、一人を除き「敗血症」と答えてくれました。それ以外の唯一の答えは「心配症」、おそらく不安げに授業を行う私に暖かいメッセージを送ってくれたのでしょう。教室に爽やかな風が吹きぬけ、新しい職場でもやっていけそうだと感じた瞬間でした。とは言え、そこは「正答にこだわり」×としました。今後よろしくお願い致します。

元気です！  
名誉会員

# ライフワーク

岡山大学名誉教授／株式会社 Office HAT 代表取締役 渡邊達夫



小さい頃からやりたいことが決まっていて、それに邁進できた人にはライフワークというものがあるだろう。私は医学部を受験したが、第二志望で歯学部で拾ってもらった。その後もいろいろな試験には悩まされ、挫折感を味わった。いまでも留年した夢を見る。「僕は歯医者だ。留年してなかった」と思って目が覚める。歯科医師になって歯学博士をいただいてからは、嫌いな受験は少なくなった。

米国の研究所で白衣を着ていたら You are a scientist と言われた。だったら科学者になってみようと思った。そのためには、科学とは何かを知る必要がある。「事実をもとにして論理を組み立て、結論に至る」こと、「理論を実践し、成果を確認する」ことが科学の一連の過程のようだ。

科学には知識と技術が必要だが、科学の成果を利用する時、人々の生活を豊かにするという哲学が重要である。歯科医師としての哲学、それは「一生自分の歯で食べられる社会」の実現だろう。

う蝕が激減した当時、次のテーマは歯周病の予防だった。歯周病は歯垢によって起こる。歯垢は歯間部に残り、歯肉炎は歯間部から起こる。だったら歯間部を掃除すれば良い。歯ブラシの毛先を歯と歯の間に入れるブラッシング法で歯肉出血は治るし、歯の動揺も口臭も改善する。「つまようじ法」と名付けた。「つまようじ法」は、歯垢・歯石除去を目的とした One-stage Full-Mouth Disinfection と比較するとほとんどの臨床指標に差はないが、歯肉出血だけは有意に改善する（改善率は1週間で1.8倍）。専門家の歯垢除去療法よりもはるかに効果的だ。歯周病原菌は血液がないと増殖できないと言う事実を考えると、「つまようじ法」を早く、多くの人に知ってもらう必要がある。

「つまようじ法」の欠点はやり方が難しいことだ。誰もが「つまようじ法」効果を受けられるように、ロボット化した電動歯ブラシ TAPG® の製造・販売を始めた。皆さんがこれを使ってくれたら、歯肉出血は減少し、レッドコンプレックスはかけをひそめ、一生自分の歯で食べられる社会に近づく。インプラント周囲炎にも期待できる。「つまようじ法」は歯垢除去効果に加えて、歯肉細胞の増殖促進作用があるからだ。

起業して4年。辛いときがある。しかし、旧教室員が青春を賭けて解明したエビデンスを世のために活用するのが僕に課せられた使命だ、国民の健康な生活を確保するために。喜寿でやっと私のライフワークが見つかった。

# 行歯会紹介

行歯会会長／江戸川区健康部健康サービス課葛西健康サポートセンター 長 優子



## 1. 「行歯会」について

「日本国民に世界最高水準の歯科保健を提供すること」を目指し、全国の地方自治体に勤務する歯科専門職（歯科医師、歯科衛生士）により設立された「行歯会」（全国行政歯科技術職連絡会の略）は、今年で結成16年目を迎えました。

会員数は令和2年6月現在790名（歯科医師160名、歯科衛生士627名、他3名）、行政に勤務（常勤）する歯科専門職822人のほとんどが加入しています。会員メーリングリストによる意見交換や情報発信、会報「行歯会だより」の発行が主な活動で、国立保健医療科学院の情報基盤（Webサイト、メーリングリスト）を用いております。ホームページ（<https://www.niph.go.jp/soshiki/koku/oralhealth/gyoushi.html>）もあり、前述した「行歯会だより」を全号閲覧できます。

## 2. 地方自治体に勤務する歯科専門職

行政に勤務する歯科専門職の数は、10万人を超える歯科医師・歯科衛生士の数（平成30年医師・歯科医師・薬剤師調査、平成30年度衛生行政報告例）からみると僅かです。

また、行政の中から見ると歯科専門職は、保健師や、管理栄養士に比べるとごく少数です（平成30年度地域保健・健康増進事業報告）。そのため「身近に相談相手がいない」「参考にできる事例が少ない」「業務内容は多様で画一的には捉えきれない（※1）」「管理職へのステップアップが難しい」など、自治体単位では解決しにくい課題もあり、全国的なつながりに需要があります。

行歯会設立以前は、どこに、誰が、どんな取り組みをしているか、よくわかりませんでした。今では他の地域のことわかるようになり、地域間の情報交換や顔の繋がった関係も作りやすくなりました。全国の先進的な取り組みや、時には失敗事例も参考にしながら会員一人一人が各自治体で活躍することで、地域歯科保健の発展に寄与することができると思っています。

## 3. 行政の歯科専門職に求められること

行歯会ホームページの「行歯会とは」

[https://www.niph.go.jp/soshiki/koku/oralhealth/document/gyoushikai\\_info.pdf](https://www.niph.go.jp/soshiki/koku/oralhealth/document/gyoushikai_info.pdf)

では「行政の歯科専門職に求められること」を以下のように記しています。

- ① 地域の特性と健康課題に対応した歯科保健計画や事業の企画立案
- ② 他職種と連携した歯科保健事業の運営と事業評価
- ③ 各ライフステージに合わせた個人・集団・組織に対する支援
- ④ 地域の歯科保健状況に関する統計資料や関連情報の収集と発信
- ⑤ ソーシャルキャピタルの醸成と社会資源のコーディネート
- ⑥ 健康危機管理及び災害歯科保健医療対策

このような人材の育成を図っていくため、行歯会では昨年度、会員の多くを占める歯科衛生士について「市区町村歯科衛生士新任期人材育成ガイドライン」を発行しました。

[https://www.niph.go.jp/soshiki/koku/oralhealth/document/shinjinikusei\\_guidelines.pdf](https://www.niph.go.jp/soshiki/koku/oralhealth/document/shinjinikusei_guidelines.pdf)

行政の歯科衛生士は人数的に少ないこともあり、保健師や管理栄養士のような人材育成が進んでいなかったのですが、行歯会として上述したガイドラインを作成できたので、今後は各地での活用を通じて改善していきたいと思っています。

#### 4. 歯科専門職のいない自治体について

全国的にみると歯科医師、歯科衛生士は職員として採用されておらず、保健師等が歯科保健担当である自治体が「多数派」です（※2）。市町村の保健師が歯科保健担当者である場合、母子保健や成人保健の中の一つとして歯科保健事業を担うことが多く、生涯保健とし連続した歯科保健活動に発展させるためには、歯科専門職のいない市区町村への歯科保健担当者（保健師、栄養士、事務職）に対する情報発信や、人材育成も課題です。また、地域の歯科医師会が公的な役割を担うことも想定し、連携することが重要と考えます。

#### 5. これからの行歯会の目指すところ

政策形成には、科学的根拠が必要です。現場では、学会声明や研究報告を根拠として提示することもあり、口腔衛生学会には現場に役立つ研究も重視してほしいと思っております。学会では行政からの発表が少ないようですが、「研究」の視点を持った人材は少なくないと思いますので、学会とうまく連携が取れるようになればと思っており、学会参加の機会を利用して、行政の歯科専門職が地域保健の関係者含め研究会等を開くことも、今後検討していきたいです。

コロナ禍で進む Web 活用により、行歯会でもオンライン会議が実現し、「地理的障壁」がなくなり、行歯会の今後の活動の幅を拡げられる可能性が出てきました。併せて、学会との「壁」も低くなればと願っています。

#### 参考文献

- ※1. 安藤雄一, 岩瀬達雄, 高澤みどり, 中村宗達, 青山 旬, 長 優子, 歯科保健を担う人的資源の特徴, 保健医療科学 2011; 60 (5)
- ※2. 安藤雄一, 岩瀬達雄, 高澤みどり, 中村宗達, 青山 旬, 長 優子, 秋野憲一, 森木大輔, 堀江 博, 田村光平, 国の市区町村および都道府県保健所における歯科保健担当者のプロフィールと業務実態, 保健医療科学 2014; 63 (2)

## 第三回は新潟大学大学院医歯学総合研究科予防歯科学分野のご紹介です。

<https://www5.dent.niigata-u.ac.jp/~prevent/japanese/index.html>

### 沿革

新潟大学大学院医歯学総合研究科予防歯科学分野は、昭和43年に開設されました。初代教授堀井欣一先生は分野の礎を築かれるとともに、う蝕洪水時代のフッ化物応用を推進され、新潟弥彦モデルといわれるフッ化物洗口の普及を先導されました。平成6年からは宮崎秀夫先生が第2代教授として着任され、新潟高齢者スタディーに代表される分野の研究を大きく牽引されました。多くの学術的知見が国内外の口腔保健推進に活用されています。そして平成30年から第3代教授として筆者が分野運営を担っており、WHO口腔保健協力センターの特色を生かしながら、分野の活動を国内外に広げております。

新潟大学医歯学総合病院では予防歯科診療室を運営しており、専門外来としての口臭も含め年間で約4,500人の患者様の口腔健康管理に従事しています。

現在の分野構成員は筆者の下、濃野 要講師、金子 昇助教、久保田悠助教、Kaung Myat Thwin 助教、西真紀子助教、高 昇将助教のほか医員2名、大学院生9名（うち留学生2名）であり、口腔生命福祉学科には当分野出身の葎原明弘教授がおります。

### 研究

当分野における基幹研究は口腔疾患の疫学研究です。昭和45年から実施している学校をベースとしたう蝕予防の介入研究では、フッ化物洗口と定期歯科健康診断および選択的シーラントの応用によって、モデル地域の11～12歳児の90%がカリエスフリー、う蝕歯数は一人平均0.1本まで成果を上げ、新潟を全国一むし歯の少ない県に導いた原動力となっています。現在はハイリスク児童の要因解明のため、口腔細菌をターゲットとした基礎研究と併行してデータ収集・分析を行っています。

また平成10年から新潟高齢者スタディーを実施しています。これは開始時点で70歳の高齢者600名を毎年追跡している調査で、歯科のみならず医学、栄養学、体力科学など多種多様な研究者が関わる学際的な研究です。これまでに得られた知見は120本を超える論文や報告となり、口腔と全身の相互関連性や疾患発生・進行の因果関係に関するエビデンスの構築に寄与しています。

臨床研究では、本学内分泌代謝内科学と共同で歯周治療が糖尿病のインスリン抵抗性の改善に与える影響に関する臨床介入研究を実施しており、現在は脳梗塞に対する有用性について検証を行っています。口臭については、歯周病進行予知のための口腔内VSC濃度の基準値確立をテーマに松本歯科大学山賀孝之教授と共同研究を行っています。

基礎研究は、*Streptococcus mutans* や *Streptococcus sobrinus* のグルカン合成能に注目したう蝕活動性試験の開発に向けて研究を行っており、菌株間の塩基配列の違いと非水溶性グルカン合成能とがどのように対応するのか分析を行うとともに、それらを発展させた遺伝子検査法の開発と臨床応用を目指しています。

### WHO 口腔保健協力センター

当分野は平成19年にWHO協力センターに指定され、国際的な口腔保健推進をコンセプトに、WHOネットワークによる海外の大学や機関と連携して、教育・研究においてWHOに協力することが求められています。国際保健としてミャンマー、ラオス、カンボジアにてWHO口腔診査に基づいた口腔疾患調査研究を行い、口腔疾患罹患の特性を共有しながら口腔保健施策の立案を支援しています。また日本やタイでは、WHOが提唱する「歯科における禁煙支援」について講習会を開催し、歯科からのコモンリスクファクターアプローチの体系化を試みています。この度禁煙支援に関するE-learning教材が禁煙推進委員会と協働で作成されましたので、今後歯科医療現場で広

く活用されることが期待されます。

その他人材育成も重要なテーマであり、海外への派遣、あるいは海外から招聘を行っています。これまで計6人の外国人教員が当分野で勤務実績があり、当分野からは延べ9人がWHOなどで国際保健研修を経験しています。さらに昨年から当分野出身の牧野由佳先生がWHO アフリカ事務局に就職して歯科保健やNCDs対策に従事しており、これからの活躍が期待されます。

国際口腔保健分野の教育研究拠点として今後も活動を続けてまいりたく、皆様のご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

(新潟大学大学院医歯学総合研究科予防歯科学分野 教授 小川祐司)



現在の予防歯科学分野構成員



# 本学会ホームページのリニューアルについて

日本大学松戸歯学部衛生学講座 教授/日本口腔衛生学会広報委員会副委員長 有川量崇



本年度中に本学会ホームページをリニューアルいたします。長年親しまれてきました本学会のホームページですが、本学会の諸活動に関する情報をより広く発信し、学会員のみでなく非学会員（医療従事者以外も含む）も、本学会が保有する専門知識・情報を検索・利用しやすくすることを目的として、昨年より広報委員会でホームページのリニューアルを進めております。

改修を実施するにあたり、次の4点を大きく変更する予定です。

- ① 既存のホームページのデザイン修正：より利用・検索しやすいデザインにするために、現在17項目のメニューが独立しているため、8項目に集約して、見やすく致します。
- ② 「一般の方へ」のページ作成：行政関係者や学校関係者等も分かりやすく利用しやすいページを作成します。特に要望の多い、「フッ化物」「禁煙」などから作成する予定です。
- ③ 認定医・指導医・研修機関のページ作成：現在はリスト一覧のPDFのリンクを貼り付けているのみですが、日本地図などを利用して、地方ごとに一覧を掲載し、より分かりやすくします。
- ④ 会員ページに「e-learning」を掲載：会員入会のメリットを少しでも増やすために、論文の書き方等に関する動画を編集委員会と共同制作中です。今後の専門医制度の教材の構築においても重要な項目だと考えられます。

今年度中には新しいホームページを改修し、タイムリーな情報発信と、会員の皆様のお役に立つサイト運営を行い、内容の充実を図るよう努めてまいりたいと思っておりますので、ご意見などがございましたら何卒宜しくお願ひ申し上げます。

## デザイン（案） ホームページトップページ

デザイン（案） ホームページトップページ

「e-ラーニング」を加えました。

「一般の方へ」のバナーを加えました。「フッ化物」「禁煙」などを考えています。

NEWS  
新着情報

20XX.XX.XX	イベント	第XX回日本口腔衛生学会・総会ホームページを公開しました。
20XX.XX.XX	お知らせ	意見・回答に「〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇」を掲載しました。
20XX.XX.XX	お知らせ	20XX年度韓国口腔衛生学会（KAPDOH）のご案内を掲載しました。
20XX.XX.XX	他団体	グローバルタバコフリーサミット 第XX回国際タバコ予防学会（TID）学術大会のご案内（20XX年XX月XX日～XX日）

過去の一覧へ

## 各種お知らせ

各種事業などについてご案内申し上げます。  
詳細は、学会誌第 70 巻第 3 号および第 4 号をご参照ください。

- 1 本学会のロゴが入った zoom 用の仮想背景を山下理事長が自作して下さいました。右図の市松模様です。JPEG ファイルご希望の方は事務局までご連絡ください。
- 2 ニュースレター第 4 号は 2021 年 3 月発行予定です。



## 編集後記 広報委員会より

ニュースレター第 3 号は安細敏弘先生、須磨紫乃先生、そして私・天野敦雄の 3 人の広報委員が担当いたしました。今回の記事、前号よりも少しだけ盛り沢山にしようとして新企画を加えました。先生方に執筆をお願いした所、皆様二つ返事でお引き受け下さり、その上入稿いただいた記事はどれも超力作！多謝万謝でございます。

コロナ禍のせいで出張激減、宴会皆無、カラオケ厳禁、そして会議や講義を Web で済ますことに違和感を感じなくなりました。人との関わりがめっきり減り、たまにある名刺交換もマスク越しでは顔も表情も判りません。積極的に患者と関わるのがいい医療人と思ってましたが、医療の在り方も変わりそうです。自宅と大学の間をブーメランする毎日、同じ景色を眺めながら歯科の未来予想図を思い浮かべています。AI、IoT、ビッグデータと苦手な key word が多いのが気になる所ですが、病気になるのを待っている医療から、遠隔未病診断に基づいた先制デジタル医療に向かうことは間違いなさそうです。

(天野敦雄)